

## ここまでの物語:

アカチは物心ついた頃には、すでに部族の時代のシャーマンとしての訓練を受けていた。老シャーマンのすぐそばで、彼女は精霊と語る方法や大地の岩骨を読む方法、闇の中に住む残忍な怪物を避ける方法などを学んだ。

彼女はそれ以外にも、若い真面目な伝道者からの教育も受けていた。師は彼が英語や現代社会の話題を教えるのに加え、キリスト教への転向を行なおうとしているのも止めなかった。

宗教に関しては、アカチは興味を抱かなかった。すでに大いなる秘密の知識を数多く学んでいたし、古えの力というものも身近に感じていたからだ。

最近になって、老師は彼女をベッドの脇に呼んだ。その顔は青白くやせ衰えていた。「アカチよ、大いなる試練がお前に近づくのをわしは見た。合衆国のアーカムという街へ行け。そこで、お前は古えの怪物と相対し、わしが授けた術を使うことになるじゃろう」

数週間後、彼女は古魔術店の扉を開いた。自分の前に来るであろう試練にまみえる事を望んで。

## ここまでの物語:

アグネス・ベイカーは、現世ではただの控えめなウェイトレスだが、前世では彼女は強力な魔女だった。現代世界では想像もできないような時代に、彼女は精霊を従え、恐るべき力で敵を倒していたのだ。

何も無ければ、彼女はそんな前世のことは知らないままでいただろう。しかしある日、ダイナーの電球を取り替えようとした彼女は梯子から落ちて頭を打った。病院で目覚めた彼女は一言こう囁いた。「ハイパーボリア」と。

しかしその後も、彼女は自分が見た前世の光景を無視するつもりだった。彼女が夢見てきた呪文の力が現実だなんてありえないことだ。試そうとすることすら恥ずかしい思いをしながら、彼女はこっそりそれを試みてみたが、それが本当に効果を発揮したことに凍りつく羽目になった。以来、彼女は新しい力を秘密裏に育ててきた。特に、他の誰にも見つかることだけは無いように気を払って。

しかし今夜、ダイナーのシフトを終えたアグネスに、空気が警告を囁きかけている。何かが近づいている。かつての彼女がはるか古えに倒した何かが。覚悟を決めなければならない。

### ここまでの物語:

ジョージ・バーナビーにとって、常に必要なものは支配だった——人生やその周囲の物事の支配だ。十九歳の時に無実の罪で一ヶ月を牢屋で過ごした後、ジョージが弁護士になったのもそれが理由だった。

鋭い思考とカリスマ的な性格を持った彼は自らが選んだ分野において秀でていることを知り、すぐに力と富とを手に入れる地位に就いた。ジョージは弁護士業における挑戦を大いに楽しみ、やがて引退の準備を始めるまでの喜ばしき日々は一瞬のようだった。彼は船を購入し、妻のマリアと共に世界を回るつもりだった。

しかし、それもある夜までの話だった。その晩、彼の家奇妙な護符を身につけた二人の男が押し入り、妻は殺され、家は火を放たれて崩れ落ちたのだ。

そして現在、彼はこの男達を追ってアーカムの街までやってきた。彼らにはこの今の無力さと、奪われた愛しきマリアの命を償ってもらわなければならない。何より、弁護士としての知識から言えば、それが彼らの賠償責任というものだ。

### ここまでの物語:

フィン・エドワーズにとって、禁酒法はこれまででも最高の出来事だった。奴らがアルコールを禁止するまでは、彼は人生を彷徨い、あちこちの半端仕事で糊口をしのいでいた。しかし、その後はアルコールの需要が熱病のように上がり、彼は法律をかいくぐりながらも人々が求める物を与え続ける安定した生活ができるようになった。彼の新たな生き方は彼の性格には特に合っていた。危険と隣り合わせ、大きな収入、そして大きな個人的満足がそこにはあったのだ。

そういう生き方も悪くないと考えていたある夜、彼はナイフを手にも自分を闇の神への生け贄に使用している気がい共をまくために、森の中を逃げる羽目になった。

フィンは執念深い方ではないが、この出来事のせいで、彼は何年も前にこの遊び場で袋だたきの目に遭って以来なかった恐怖を彼に思い出させることとなる。

銃と弾を買うだけの金を借りて銀行を出たフィンは、狂人共にあの日を後悔させてやることを誓っていた。

## ここまでの物語:

韓国を出自とするミンの一家は、日本による迫害から逃れ、新たな出発をするためにアメリカにやってきた。彼らは成功をめざして一生懸命働き、ミンも小さな短大に進学することができた。ミンはその立場故に嫌がらせも受けたが、両親は韓国でもっとひどい状況だったことを思いながら、彼女は勉強に集中した。そして彼女は無事単位を取り、アーカムの小さな事務所で職を得ることとなった。

当初ミンが心配していたのは、彼女の雇い主であるトーマス氏が“不適切な打診”をしてくるのでないかということだったが、彼は彼女をそういう風には見ていないようで、おかげで彼女も安心して仕事に集中できた。そして、その後に彼が彼女に貸してくれたのが、あの本だ。「黄衣の王」を読み進むにつれ、彼女はその内容に対する恐怖と拒否反応を隠せなかった。彼女がトーマス氏にこの気持ちを打ち明けると、彼は奇妙な笑みを見せ、「先を読みなよ。どんどん面白くなってくるから」と言った。仕事のことを心配しながらも、彼女は自分には合わないと言げ、本を彼に返した。

翌日、彼女は病院からの電話を受けた。トーマス氏が死亡し — 自殺だった — 何らかの理由で彼女が緊急時の連絡先になっていたのだという。

ミンは今、トーマス氏の私物を抱えて聖マリア病院の外に立ち尽くしている。あの恐るべき本と共に、何をすべきかに迷いながら。

## ここまでの物語:

両親が経営する農場で育ったハンクにとって、考えるよりも身体を動かす性格になるのは当然のことだ。彼は馬鹿ではない。実行する前に考えることに長い時間を割かないだけだ。そのせいで、彼は面倒に巻き込まれがちだった。

しかし一方で、それが役に立つこともある。例えば先月、牛が暴れ出していたときのことで。ショットガンを手にはハンクは外に駆け出し、何か巨大な秃鷹の類が家畜を襲っているのを見つけた。人によっては自分の正気を疑い、別な人なら恐怖に気を失うような場面だ。しかし、ハンクはただ狙いを定め、その忌々しい生き物の頭を吹き飛ばした。あれが何だった疑問に感じたのは後のことだ。

父はその死骸を見て、ミスカトニック大学の知り合いの教授にこれを持っていくとハンクに告げた。彼らはそれを木箱に詰め、近くの鉄道駅まで車を走らせ、アーカム行きの列車に飛び乗った。

それ以来、物事は厄介続きだ。木箱は列車から消え、父は無くなった木箱の件で苦情を言いに行っただけで行方不明になってしまったのだ。

互いにはぐれた時に落ち合う場所として父に指定されていた雑貨店で、ハンクは待ちくたびれながら、そろそろちょっとばかり考えることをしてみなきゃいけないかなと思い始めている。

### ここまでの物語:

パトリスの人生は、ずっと音楽に捧げられていた。舞い上がるソナタ、優雅なアリア、響き渡るマーチ、それらは常に彼女のすぐそばにあった。

しかし、演奏の最中、彼女は時に意識の橋に引っかかる何かを感じることがある — 彼女を見つめ、待っている何かを。何を待っているのかは彼女にはわからなかったが。

その存在は先月からさらに大きくなり、その緊張から彼女のバイオリンの腕は落ち始めていた。こんなのは我慢できない。

そして、彼女が年老いたジプシーと互いの曲を演奏していたとき、ジプシーは彼女が邪悪な霊に見張られていると語った。一ヶ月前なら怪しんで聞き流していたかもしれない話だ。ジプシーはアーカムにある店を教えてくれた。そこなら悪霊を払うのに必要な物が見つかるだろうと。

今夜、パトリスが骨董品店の扉をくぐることになったのはそう言う理由だ。緊張と言うよりは、少し馬鹿のような気分になりながら。

### ここまでの物語:

星々は偉大なる、また恐ろしき秘密を抱えていて、そこを覗き込む勇気のある — あるいは好奇心に満ちた — 者達にそれを明かしてくれる。ノーマンは自分のことを特に勇気のある者と言うつもりはないが、謎を無視できるほど無能ではないとだけは言えるだろう。

なので、研究中に空の一角の星が六つ消失したとき、彼はそれをそのままにはしておけなかった。仲間がそんなのは妄想だと言ったときも、家に帰って眠って忘れるように言ったときでも。

この研究には数年を要し、彼の経歴もほとんど死んだも同然になっていたが、最終的にその答を見つけたのは、仲間なら誰もそれを読んでいる所を見られたくないような本の中だった。古い秘本の中には、消失した星やその並び、そしてそれらが消失した日付が事細かに書かれていた。その書に曰く、これはあらゆる物にとっての終末の徴だと。それは大いなる獣が、人々が作り出したあらゆる物を粉々にしてしまう先触れだというのだ。

この獣が世界を破壊するのを止める手段は、ノーマンにも定かではなかった。自分自身が強い人物でないのはわかっていたが、星々の中に答があるなら、最後の最後まで破壊の路の前に立ちほだかるつもりだ。

## ここまでの物語:

サイラスは、いつでも海が呼んでいるのを感じていた。小さな時から、彼は波の中で遊ぶのが好きだった。海の中には、心和むこの世の物とは思われぬ何かがあった。それは他では得られないものだった。

だから、サイラスが船乗りになって世界を旅するつもりであることをうち明けたとき、家族は誰も驚きはしなかった。実際、皆は彼がその結論に達するのを何年も待っていたのだ。

彼は商船会社と契約し、続く何年かをあちらの港からこちらの港へと渡りながら、あらゆる物を目に焼き付けることに費やした。

時折、彼は夢を見た。当時の彼の眠りは、奇妙な、この世の物とは思われぬ海底の光景と、歯をむき出して彼に微笑む奇怪な化け物の映像に取り憑かれていたのだ。彼は徐々に、この夢には邪悪な何かがあることを感じ始めた。彼が家族に問いかけたが、彼らはうなずいてこう言った。「インスマスの直系に関して知っておく頃合いだろう。黙って受け止めるがいいよ」

二日後、サイラスはアーカムの埠頭に船を着けると、少しばかり邪悪な家族の話の意味する所を見つけようとしていた。

## ここまでの物語:

几帳面。規則通り。連邦捜査官の手引きを見れば、ローランド・バンクスの写真の脇にはこう書いてあるだろう。そんな写真があればの話だが。

規則が足枷であり面倒でしかない他の捜査官にとは異なり、ローランドにとってそれは型通りであることの安心感だった。状況に従ったガイドラインがあることは、心のよりどころだった。少なくとも、最後の事件までは。

奇妙な怪物と戦う羽目になったり、時空を超える門を通り抜けたり、魔法の呪文を唱えたりといった項目は、ローランドの手引き書にはどこをどうひっくり返しても書かれていない。この事件は急激に最悪の事態へと向かっていて、ヘマをやらかそうものなら最低でも職は失うことになるだろう。

狂喜に陥った新たな目撃者との面談を終えたローランドは、精神病院の外に腰掛け、ボロボロになった捜査官の手引き書を鞆に放り込んでため息をついた。少なくとも当局は彼に応援を送り込んでくれたようだ。この混乱の中から意味のある何かを見つける手助けになってくれることを願おう。

### ここまでの物語:

トミー・マルドゥーンには、このイカれた街で何が起きているのか見当が付いていなかった。ボストンの警察学校を卒業するや否や、彼はアーカムの保安事務所へ出向させられた。それ自体は悪いことではなかったが、アーカムで起きている、趣味の悪いホラー小説から抜け出たような出来事は話が別だ。森の中の奇怪な化け物、裏返しになった人々、そしてさらに悪い事態。

それでも、トミーは保護と忠誠を誓っていた。誓った彼らが何であれ、命を賭けて守ろうと。ベッキーと名付けた愛用のライフルもある。間違いようはない。

警察署の前に立ち、トミーは武者震いが背筋を駆け上げるのを感じていた。「いいか、トミー」と彼は小声でつぶやいた。「ヒーローになる時だぞ」

### ここまでの物語:

確かに、スキッツは捕まるまでにいくつかの銀行を襲ってきたが、人を殺したことは一度もない。誰かを脅したことは？ 恐喝して物を奪ったことは？ ああ、いいとも、確かにそうしたことはあるが、彼は悪い人物じゃない。ただ単に自暴自棄だったただけだ。警官に母の手術のための金があると告げた時、彼らは単に笑っていただけだった。こんな言い訳を聞いたのは一度や二度じゃないのだろう。

彼の母は、二年目の刑期をつとめている最中に病気で死んだ。以降は、誰も彼を訪ねる者はいなくなった。同房のブラッド・ホリンズと言う名のやせこけた小柄の男と親しくなることで、彼は自分の正気を保っていった。ブラッドは奇妙な奴だった。彼は毎晩静かな声で“旧きもの”の話を喋りまくり、夢の中での異様な冒険をスキッツに語った。スキッツはその話を面白半分聞いていたが、ある夜に、ブラッドが眠ったままで奇妙な言葉を唱えているのを耳にして目を覚ました。何か焦げる臭いに気付いた彼が同房者に目をやった瞬間、ブラッドは火に包まれ、叫び声を上げた。彼はねじ釘で磔にされていたが、そんなことができるはずはなかったのだ。

そして今、ようやく仮釈放の身となったスキッツは、ブラッドの話にしばしば登場した場所にいた — アーカムの街だ。おそらくここなら、彼の友人の死の際に持ち上がった疑問に対する答が見つかるだろう。

## ここまでの物語:

全大陸の山を制覇したと言える人物は多くはない。食人族の部落から黄金の銅像を盗み出した人物となれば、その数はさらに少なくなるだろう。男性ばかりの社会の中の女性として、ウルスラはそれを主張できる数少ないユニーク人物と言える。

ウルスラは少女だった頃からあらゆる決まりを破ってきた。木に登り、泥の中で遊び、森を探検し、その他様々な“まともな女の子がすべきでない事”をやってきた。

そもそも、彼女は男性に引けを取らなかった。ポストン大学に入学した時、彼女はそれを証明しようとし、その結果、考古学についてはどの学生をも敵わないレベルに達した。彼女は学部をトップで卒業し、その才能を使って探検家になり、世界中を回っては雑誌にコラムを投稿するようになった。

そして今回、彼女は盗まれた遺物と世界の片隅に隠れているカルトの面々と死体の跡を追って、ここアーカムを訪れた。ウルスラは一人ほくそ笑むと、こう思った。「これこそが冒険だわ」

## ここまでの物語:

数年前の競技会の後にスカウトが彼女に接触してきたのは、今にすればなんとも現実離れした話だった。とにかく、彼女は政府のためにこの国を守るべく働いている名を匿名の機関の興味を引いたのだ。新たな挑戦を辞退することなど考えず、トリッシュははやる思いで契約を結んだ。

彼らが最初に彼女に教えた事のの一つが、集中する事の強さ — 精神と肉体を同調させ、その全体として限界を超える方法だった。敏捷な肉体と不屈の精神で、彼女はすぐに最高のスパイの一員に名を連ねることとなった。

しかし、最近になって彼女は自分が属している組織の真意に疑問を持つようになってきた。彼らは本当に政府に属しているのだろうか、それともこの国を背後から操っている影の組織の類なんじゃないだろうか？ 秘密裏の調査は、やがて彼女をマサチューセッツ州の小さな街、アーカムへと導いた。

通常であれば、トリッシュの仕事にとって新聞社は疫病の如く避けるべきものだ。しかし、アーカム・アドバタイザー社の前に立った彼女には、これが最後の手がかりだというのがわかっている。彼女の探す情報がどこかにあるとするなら、それは間違いなくここにある。

### ここまでの物語:

ゾーイは自分が特別である事を知っている。それは彼女が六歳の時、神が自分に語りかけたあの夜以来 — 恐ろしい火事が彼女の両親を奪ったあの時からだ。神は彼女に、世界を守るための代理人として人々の中から彼女を選んだ事を告げた。彼女は罪無き人々を守り、邪な人々を罰する者であると。

それ以来、彼女に厄介な事が起こるたびに、神は彼女の元を訪れ、導きと安心を与えてくれた。神はまた、彼女をたびたび邪悪なる行いをする者の下へと導いた。そのたび毎に、神の助けと共に、善なる者が勝利を得た。そしてある日、神は彼女にアーカムに来るように告げた。そこで彼女はこれまでで最も大きな試練にまみえる事になると。それ以来、神は彼女に語りかけてはいない。

今、ゾーイは列車からホームに降り立ち、指で十字を切りながら、その身にこの地の邪悪を感じていた。この街の汚れを浄化すれば、神は再び彼女に語りかけてくれるだろう。

### ここまでの物語:

世界が真に舞台であるとするなら、ウィリアム・ヨリックはせいぜい端役がいいところであろうと思っている。シェークスピア俳優になるべく数年を学習に費やした後、彼は芝居の台詞ではパンにありつけないことを知る事となった。彼は必死に職を求め、墓掘り人夫としての仕事を受け入れた。

墓掘り人夫は普通の仕事ではなかったが、それが問題になる事はなかった。そもそも、シェークスピアの最も素晴らしい幕の一つは墓掘り絡みではないか。確かにきつい汚れ仕事だが、ウィリアムは真面目な仕事の手を抜いた事はなかった。

ただ、それももちろん奇怪な死体が起き上がってくるまでの話だ。奇妙な人ではない何かは、ウィリアムの皮膚をざわめかせ、彼の手には汗がにじみ出た。以来、彼がどこへ行ってもよそ者が彼を見張っているのを感じている。その死体を大学に持ち込んだ事が最後の失敗だったと、彼は本能的に理解していた。

ウィリアムが南教会の席に腰掛けているのもそれが理由だ。彼は特に信心深い人物ではなかったが、マイケル神父はいつだっていい助言を与えてくれた。今日、ウィリアムは世界が全く違った物になってしまうような気分になっている。